

『戦争は女の顔をしていない』

2016年04月09日

昨年のノーベル文学賞は『チェルノブイリの祈り』を著したスベトラーナ・アレクシエービッチが受賞した。被曝した人々の衝撃と悲しみを柔らかな感性で、しかもエネルギーに聞き取ったドキュメントに感銘を受けた。人の話を聞き出すことは容易ではない。信頼関係が結べなければ、話してもらえない。彼女は忍耐強く、聞き役に徹している。被曝の悲劇を伝えたいという使命感が高質なドキュメントを作り上げたと思わされる。

彼女の処女作は『戦争は女の顔をしていない』である。ソ連は第二次世界大戦で百万人を超える女性たちが従軍し、看護婦や軍医だけでなく、武器を手に、実際の戦闘にも参加している。戦後、世間から白い目で見られ、戦争体験を口にできなかった従軍女性たちの五百人以上から聞き取りをして、女性から見た戦争の実態を伝えている。ようやく忘れかけていた戦争を思い出させたと怒る人もいる。当然、口籠ってしまう。反対に、隠していた過去を話せると饒舌に話す人もいる。

ドイツ軍がソ連を攻撃し、戦火が拡大していく中で、男性の兵隊だけでは不足し、女性たちも戦争に狩り出されていった。その中には、15歳や16歳の少女たちもいた。戦場で生理を迎えた娘、恐怖のために生理が止まった娘、一夜にして白髪になった娘もいた。彼女たちは祖国を守ろうと、親たち、軍隊の反対さえ押しつけて、健気に従軍している。しかし、戦場は体が飛び散り、耳をつんざく爆音、死臭が立ち込める地獄である。

私は下記の証言が心に残り、救われる気がした。「戦闘は激しいものでした。白兵戦です。…これは本当に恐ろしい。…人間のやることじゃありません。なぐりつけ、銃剣を腹や眼に突き刺し、のど元をつかみあって首をしめる。骨を折ったり、呻き声、悲鳴が渦巻いています。頭蓋骨にひびが入るのが聞こえる。割れるのが…戦争の中でも悪夢の最たるもの、人間らしいことなんか何もない。」この女性に古参兵が来て、抱きしめ「戦争が終わって生き残れたとしても、この子は人間に戻れないよ。これで終わりだ。こんな恐ろしい目にあって、こんなことに耐えて、しかもこんな若い時に」と言った。戦争で負うトラウマは抜き難いものとなる。ソ連はアフガニスタンに侵攻したが、ゲリラ戦で敗れ、撤退した。その戦争でトラウマを負ったソ連兵たちの実情も報告している。彼女はその後、ある医者から「私の唯一の助言は、結婚して、できるだけたくさん子供を持つことだ。それしかないな。子供を一人産むたびに身体は回復していく」と言われた。彼女は戦後、結婚して5人の息子を産み育て上げた。そして「私が一番驚いたのはあんなすさまじい経験をした後でかわいらしい子供を産むことができたこと。良いおかあさんに、そして良いおばあちゃんになれたことです。今、すべてを思い返して、あれは自分じゃなかった。だれか他の女の子だったんだという気がします」と、戦争していた女性は私ではない、今の良き母、良き祖母が私であると語っている。新しい命を産みだす女性の逞しさに敬服する。

スターリングラードの攻防戦は熾烈を極めた。ソ連兵の死傷者は100万人以上、ドイツ兵は84万人以上と言われている。その戦争を生き抜いた女性が「戦友が集まるとハンカチが足りないのさ。戦友会ってそんなふうだよ。涙の海になってしまう。…兵器のおもちゃなんか買ったこともないし、あげたこともないよ。自分の子供にも他人の子供にも」と、戦争の癒されない悲しみを語り、おもちゃの兵器をも拒絶している。「戦争は女の顔をしていない」と言う。男の顔をしているのだろうか。男も戦争には行きたくない。問題は、戦争をしかける勢力を押し止められるかどうかにかかっている。